筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第二十六回）

「相島（あいのしま）と万葉集」

福岡県の北西部、北の北九州市と南の福岡市の間にある新宮町（しんぐう）（福岡県糟屋郡（かすや））は福岡市に隣接していることから近年住宅団地の造成が相次ぎ福岡市のベットタウン化している。

この新宮町の北西部に福岡、佐賀両県に広がる海。「玄界灘」に面している。この海岸にある新宮港から町営渡船でわずか１７分のところに東西に長く三日月形をした離島「相島」が玄界灘に浮かぶ。

・【福岡県の地名】事典（日本歴史地名大系）によると「相島」は玄界灘にあり、新宮港からは北西に約七・二キロ。面積約一・二五平方キロの小島で玄界国定公園の一部。「続風土記」は【阿恵島又は阿部島】であげ、今は藍（あい）島と称し、周囲一里余と記す。

・「相島」は大陸と九州を結ぶ航路の要衝にあたることから古くから開け、その上、港は海が深く背後の山が玄界灘から吹きつける北西の季節風を防ぐなど船の停泊には最適の天然の良港をもっているため海を通じてきた古代からの遺跡、史跡が多く残っており、歴史のつまった謎の島ともいわれている。

・また、「相島」が位置する新宮町のホームページでは万葉集や続古今集にも詠われた歴史ある島であるとも記されている。

・中村行利著「万葉と九州」には江戸時代に福岡藩の著名な儒学者であった貝原益軒が編集した「筑前名寄（ちくぜんなよせ）」に、「相島が万葉の阿倍島であるとしている。」ことが記される。

・万葉集には相島（阿倍島）について次の歌が詠われている。

阿倍の島　鵜（う）の住む磯に　寄（よ）する波　間（ま）なくこのごろ　大和（やまと）し思（おも）ほゆ

巻三―三五九　作者　山部赤人

（解説）阿部の島の、鵜のとまっている磯に寄る波が、間なく寄るごとく、やむまもなくこのごろは大和のことが思われる。

・この歌は眼前の景を具象的にとらえて思いを述べているとの説がある。

・作者は海路で筑紫に下って来て嵐にあったか、なんらかの事情で、この相の島に寄港し、故郷大和を懐かしみ、この歌を詠ったのであろうか。

・なお、万葉集に詠われている「阿倍島」の故地については福岡県糟屋郡新宮町相島の他に「大阪市阿倍野あたり、」あるいは「山口県豊浦郡藍（あいの）島（しま）」等の諸説がある。

・「相島」の歴史は古く、小さな島内には古墳時代前期から終末期にかけての古墳群「積石塚（つみいしづか）」がある。古墳は一般的には土を盛って造るのに対し、この「積石塚」は石を積んだ全国的にも数少ない珍しい古代の墓で「国指

定史跡」に指定されており、古くから人が住んでいたことがうかがえる貴重な遺跡が残る。

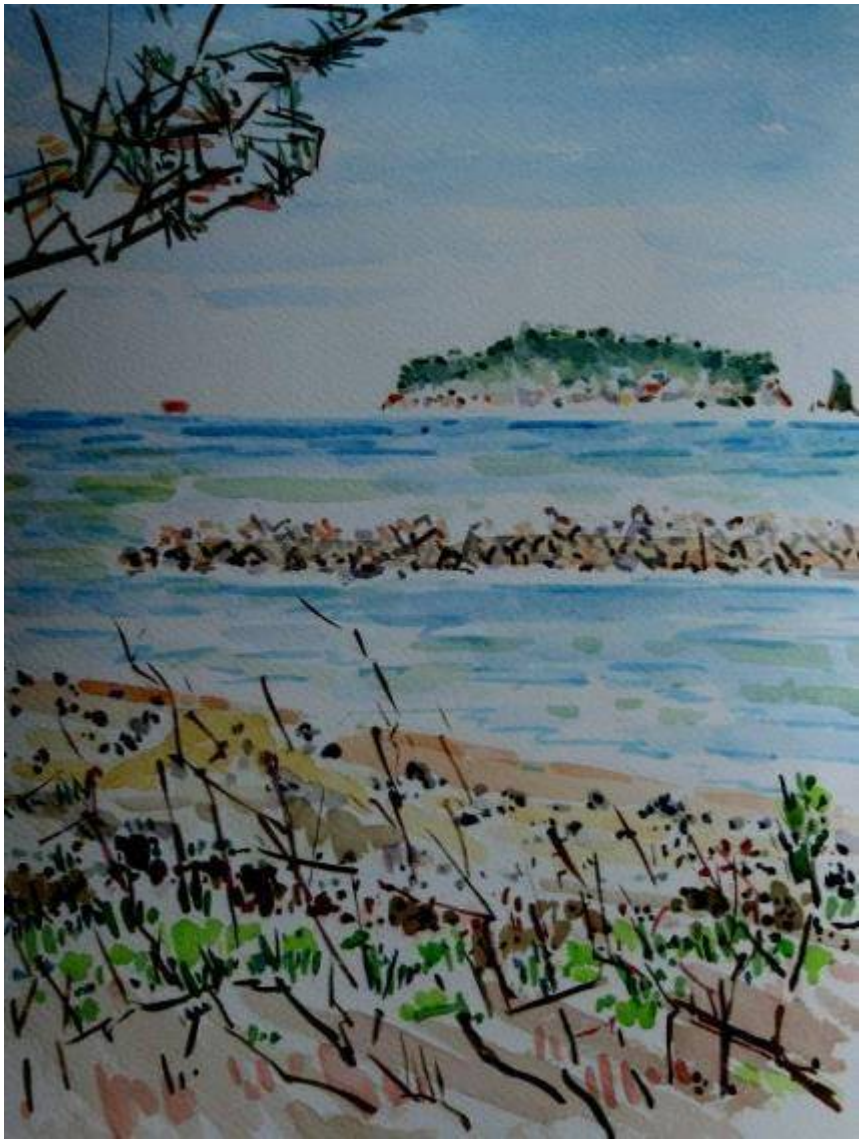
また、「相島」の位置は大陸、特に朝鮮とは次の寄港地である壱岐と赤間関（現在の下関）との中継点にあり、その上、港が天然の良港であるため、室町時代の文禄元（一五九二）年・慶長二（一五九七）年に豊臣秀吉が朝鮮出兵の際に相島に立ち寄り航海の安全と戦勝を祈願した時の史跡がある。さらに最も「相島」を有名にしたのは江戸時代、徳川将軍の代替りのたびに、祝賀の目的で朝鮮国王が江戸幕府に派遣した使節（朝鮮通信使と呼ばれた。）は徳川幕府の２６０年余りの間に１２回来日しているが通信使の江戸への通り道である福岡藩はそのうちの１１回はこの「相島」（１回は対馬）でもてなしをしており、当時の国際交流の最先端の場であったと言われている。

・福岡市中央部から相島へは福岡市営地下鉄貝塚駅で西鉄貝塚線に乗り継ぎ約２５分で終着駅「新宮駅」で下車し、コミュニティバス約２０分で相島行き渡船場新宮漁港に到着、一日に六往復している町営渡船にのれば１７分余りで「相島」に着く。相島の産業は漁業が中心である。また、漁船の主航路にあたることから避難港としても重要な役割を持つ、近年は磯釣などのレジャー漁業などが盛んである。

（参考文献）
・中村行利著「万葉と九州」・福岡県の地名辞典（日本歴史地名大系）・角川日本地名大事典
・新宮町ホームページ等

（写生地）

新宮海岸から玄界灘に浮ぶ「相島」を描く。（杏　花）



（相島位置図）